（平成２７年８月１８日）

第１３回　赤松小三郎研究会　のご報告

日時　　：Ｈ２７．８．１８（火）１８：４０～２１：００
場所　　：東京・文京シビックセンター　小ホール
出席者　：１５２名（同窓生６４名、一般８８名）

◎講演会「幕末の偉才　赤松小三郎」
講師：青山忠正佛教大学歴史学部教授

今回は、文京シビックセンター 小ホールで一般の方を含めて１５０名を超える大勢の参加のもと、講師に、赤松小三郎を史実から精査し、埋もれていた赤松に脚光を当てた青山忠正（あおやま ただまさ）佛教大学教授を京都からお迎えし、大変盛況な講演会となりました。

＜配布資料＞
１．本講演のレジメ（青山教授作成）

＜内容＞
〇赤松小三郎研究会 会長 丸山瑛一　より挨拶
〇　　　〃　　　事務局長 小山平六　より講師 青山教授の紹介

※下記レジメは、当日配布された講演のレジメ（青山教授作成）に沿って作成しました。
※太字・下線の表示、及び【 】内の補足は下記レジメ記録者による手入れ・加筆ですので、あらかじめご了承願います。
※（　）内の西暦の後の年齢は、赤松の数え年です。

・・・

１．赤松小三郎についてはじめて聞く方へ

赤松小三郎（１８３１～１８６７）。信濃国上田藩士。勝海舟門人として長崎海軍伝習所で修業。のち、京都で英国式兵学塾を主宰。**次の２つが赤松の特筆すべき業績。①「英国歩兵練法」という初の本格的な陸軍の歩兵操典を英語から翻訳刊行し、英国の近代的な兵術を教授した兵学者であった。②慶応３年５月、越前の松平春嶽、薩摩の島津久光に、上下両院制を含む議会制的な政体構想【いわゆる「建白七策」】を非常に綿密に作成して建白した。**最期は薩摩の手で暗殺される。【享年 37 歳】

２．生い立ちと修業時代

・天保２年（１８３１）４月４日、上田の大名、松平忠優（ただます）[のち忠固（ただかた）]

の家来、芦田勘兵衛の次男・清次郎として生まれ、幼少のころから数学を好み、普通の子供とは違っていたという。
・嘉永元年（１８４８・１８歳)、江戸に留学し、幕臣内田弥太郎の「マティマティカ塾」に入門し、西洋数学、天文学などを学ぶ。なお内田は、明治６年（１８７３）１月１日の太陽暦採用の中心人物。内田の他にも明治新政府は優秀な旧幕臣を結構多く登用している。彼らが明治新政府を支えていたとも言える。但し役職は中クラス以下でトップは主に薩長が占めていた。
・嘉永５年（１８５２・２２歳)、下曽根金三郎（幕府講武所砲術師範。１８５６～）に入門し、西洋砲術を学ぶ。
・安政元年（１８５４・２４歳)、上田松平家の家来、赤松弘（１０石３人扶持）の跡継ぎの予定者として養子に。芦田家の跡継ぎは実兄の柔太郎。再び江戸に出て勝海舟に入門。翌年、長崎海軍伝習所に。約５年間在学し、蘭学、英学、兵学、航海術学等を学ぶ。ここでは幕臣だけでなく、日本全国（西日本中心）の各藩が学んだ。
・安政６年（１８５９・２９歳）江戸に戻る。一旦上田に帰り、さらに江戸へ。横浜開港され貿易開始の頃。翌年（萬延元年　１８６０・３０歳)、咸臨丸渡米。赤松は渡米の選に漏れ非常に悔しい思いをする。同年３月、養父弘の死去に伴い、赤松家の家督を相続。
・文久元年（１８６１・３１歳）正月、清次郎から「小三郎」へ改称。先の咸臨丸渡米の選に漏れた悔しさから、咸臨丸に同行した赤松**大三郎**（１８４１～１９２０。旗本。明治期には海軍中将）をもじったという説が有力。三男でもないのに三を使う理由は他に理由が考えられない。この当時は上田にいて、卑役を与えられて彼の才能を活かす場が無かった、不遇時代。
・文久３年（１８６３・３３歳）４月、松代真田家の家来、白川久左衛門の娘たかと婚姻。この縁もあり松代の佐久間象山と会談。象山は赤松より２０歳年上だったが、二人は蘭学・兵学を通じてお互いに敬意を表しており、子弟関係ではなく学者同志の交友関係だった。同年、８月１８日の政変、長州は京都から追放される。
・元治元年（１８６４・３４歳）７月、禁門の変、長州は朝敵に。孝明天皇は長州が大嫌いだった。明治以降、長州はそのことをヒタ隠した。上田の松平家も征長出兵（第一次）に動員、赤松も従軍するため江戸に出る。戦況は停滞していたため時間があったのだろう、１１月頃から横浜に通い、英駐屯軍の士官アフリン（アプリン）に就いて英語や英国兵学を学ぶ。赤松の語学習得の才能は大変優れていた。

３.『英国歩兵練法』の翻訳刊行
・慶応元年（１８６５・３５歳）２月、下曾根塾に再入門。横浜通い続く。５月頃から翻訳を開始。原本は「Field Exercise and Evolutions of Infantry」（歩兵の野外運動と隊形)。著者は英国の War Office。いわゆる官版。現在ウィキペディアの「赤松小三郎」の項目で、電子書籍化された原本（１８５９年版・オクスフォード大図書館蔵）を読める。 何回か改訂版が出ており、赤松は１８６２年版を翌年にはすでに入手していたと思われる（文久３年４月２８日付け、赤松小三郎宛て佐久間象山書簡、参照)。この本は、従来ゲベール銃による密集隊形であった歩兵戦闘法に代えて、ミニエライフル銃（ゲベール銃より弾の飛距離は約２倍、かつ命中率もより高まった）による散開戦闘法を初めて公開した、当時のヨーロッパでも革命的なものだった。
・慶応２年（１８６６・３６歳）２月、江戸から京都に出て、二条衣棚に家（私）塾を開く。

同年３月、江戸日本橋の山城屋佐兵衛発兌、『英国歩兵錬法』（えいこくほへいれんぽう）を翻訳刊行。全８冊、「下曾根稽古場蔵板、紀元千八百六十二年施條銃式」。浅津富之助（１８３８～１９０９・加賀前田家家来、のち南郷茂光と改名、海軍官僚。明治２４年、勅選貴族院議員。その孫に、南郷茂章：海軍軍人で日中戦争における撃墜王）との**共訳**。
第１編赤松訳、第２編浅津訳、第３編上下、赤松訳、第４編巻１・２、浅津訳、第４編完（付図）、第５編赤松訳。表紙が青かったことからいわゆる「青本」と呼ばれる。【当日、うち青山教授所蔵本６冊をお持ちいただき拝見させていただきました。】
・慶応３年（１８６７・３７歳）５月、薩摩の依頼で『英国歩兵練法』の改訂版、『重訂 英国歩兵錬法』（赤松が単独で翻訳）を「薩州軍局」から薩摩蔵本として刊行。表紙が赤かったため先の「青本」と区別していわゆる「赤本」と呼ばれる。【「赤本」は薩州軍局により厳しい管理下におかれた。】

４．政体建言七条【いわゆる「建白七策」】

・慶応２年（１８６６・３６歳）８月、幕府に対し、政体改革の建白【時事を論じた「口上書」～長州征伐は勝算がない、非常の時局には破格の改正は当然で門地格禄に全くとらわれず広く有能な人材を登用し、さらに海陸兵制を改革刷新して富国強兵につとめることが緊要、などと説いた】。同年１２月、幕府は赤松を開成所教授に登用しようとしたが、主家（上田松平家）の承諾が得られず実現せず。その頃までに、私塾では薩摩などをはじめ入門者相次ぎ、８００人に及ぶ。
・慶応３年（１８６７・３７歳）５月、越前の松平春嶽、薩摩の島津久光に、**上下両院制の議院構想を含む７カ条の政体構想を建言。**越前松平家の記録、『続再夢紀事』（ぞくさいむきじ）同年５月１７日条に全文写しあり。
【「御改正の一、二端申し上げ奉り候口上書」→ 七カ条からなる、いわゆる「建白七策」（けんぱくななさく）。以下では「建白七策」と略称。】
特に政体構想に直接関わる１カ条目の内容は次の通り。「**議政局**を立て、上下二局に分かち、その下局は国の大小に応じて、諸国より数人ずつ、道理の明なる人を、自国及び隣国の入れ札（選挙）にて選抽し、およそ百三十人に命じ、常にその三分の一は都府にあらしめ、年限を定めて勤めしむべし。その上局は、堂上方（公家）、諸侯、御旗本の内にて入れ札を以て人選し、およそ三十人に命じ、交代在都して勤めしむべし。国事はすべて、この両局にて決議のうえ（中略・行政府が承認しなくとも必要ならば）直ちに**議政局**より国中に布告すべし」

福沢諭吉の『西洋事情』は前年（慶応２年）１０月に刊行され、２０万部超の当時の大ベストセラーで、アメリカ連邦政府と大統領制、上下両院制などが紹介されている。赤松の遺品目録の中に同書もあり、赤松も同書を読んでいたに違いない。
そういう意味ではこの赤松の「建白七策」の内容は当時、政治の最先端であった京都において知識人の間では常識であったとも言える。春嶽や久光がこの建白書を最初に見たときは「やっぱりこのような建白書が出てきたか・・」という感想だったかもしれない。【ただ、赤松の「建白七策」ほどこの時期に他に先駆けて、日本の近代化に向けて具体的に描いたものは他にない。また、すぐ後の「船中八策」や「新政府綱領八策」のモデルになったと思われる。】

５．東洞院通り五条下ルの暗殺

上田藩から、京都の赤松に再三の召喚命令で、やむをえず帰国を決意。帰国直前の慶応３年（１８６７）９月３日午後４時頃、東洞院通り（ひがしのとういんどおり）を北上中に路上で二人の男に斬られる。一人は間違いなく、薩摩の中村半次郎（桐野利秋）。軍事・政治の機密保持のためか。また、赤松の「幕薩一和」（ばくさついちわ）の考えは、当時討幕に傾いていた薩摩にとって邪魔だったのであろう。暗殺を命じたのはおそらく西郷隆盛あたりだろう。【享年３７歳】

※講演の途中で、青山教授が事前に上田市立博物館、他ゆかりの地を訪れて撮られた写真の解説がありましたので、幾つか紹介します。

⑴赤松小三郎の肖像～慶応３年４月、京都で撮影。裏に赤松本人の署名がある貴重な写真。既に丁髷（ちょんまげ）を落とし、洋服ズボン姿に革靴、刀は先端が両刃でサーベル状。顔の表情は意気揚々としている。

⑵兄 柔太郎への手紙～慶応３年８月１７日付（暗殺される半月前）、決して達筆ではないが筆跡からはとても繊細さを感じる。幕薩一和のために西郷吉之助（隆盛）と談合した、との内容あり。また、兄 柔太郎も上田でかなり突っ込んだ政治活動を行っていたようで、この手紙は単なる近況報告ではなく、政治情報の交換の側面がある。当時の上田藩松平家は幕府と薩摩の間に立つ大きな位置を持っていたはず。そもそも上田藩松平家の位置・立場が幕末史研究の中であまり明らかになっていない。これが明らかになれば赤松の一連の政治的な動きもより理解できるのではないか。

（以上、２枚の写真は上田市立博物館所蔵）

⑶上田城址公園内　赤松小三郎碑～弟子の一人であった東郷平八郎（元帥伯爵）の碑文揮毫の紹介あり。【碑裏面には事実と異なる説明もあり。（例）「會刺客ノ害ニ遭フ」～会津によって殺害された】

⑷三将軍が乗った小舟～上田市大屋神社蔵、日清・日露戦争のヒーローとなった伊東祐亨（すけゆき）元帥、東郷平八郎大将、上村彦之丞中将が上田へ来遊された時に舟遊びで乗った小舟。

⑸赤松小三郎 遺髪の墓～上田市月窓寺。現在、上田市指定史跡に指定されている。赤松小三郎の墓は京都黒谷金戎光明寺にあり、旧墓石は現在、上田市常盤城 旧丸山邸の赤松小三郎記念館に移設保存、公開中。

【上記の他、上田高校の古城の門とお堀（旧藩主居館跡）の写真まで紹介していただきました。青山教授、ありがとうございました。】

６．質疑応答

⑴ 赤松が上田と江戸や長崎を行き来しているが、その費用はどこから出ていたのか？

→はっきりとはわからないがお金の使い方からすると、官費だっただろう。長崎海軍伝習所在学は間違いなく主家から派遣されたので官費。問題は京都での私塾。そもそも主家の許可は得ていたのか、許可を得ていたとしても費用はどこから出ていたか？今後の研究課題であ

る。

(2)①「建白七策」を、松平春嶽や島津久光は実際に目を通したか？

→春嶽や久光は読んでいるはず。いずれも赤松と関係があり（春嶽は直接面識は無いにしろ私塾の門下生に越前藩士がいて話を聞いている、久光は『英国歩兵錬法』の翻訳を依頼している）、赤松は読んでもらえるだろうと思って建白した。

②「建白七策」は、慶応３年５月１７日の四侯会議の前に出されたのか？

→そもそも四侯会議は何回も行われていてはっきり何月何日というものではない。また、「建白七策」自体には日付が無く、越前松平家の『続再夢紀事』慶応３年５月１７日条に、赤松が越前藩邸にやってきて春嶽宛に提出した、と記録がある。今のところ四侯会議で話題になったかは記録にないので不明だが、春嶽から春嶽と仲が良かった山内容堂に「建白七策」を紹介したとしてもおかしくはない。

③嵯峨根良吉（さがねりょうきち）【丹後宮津出身の蘭学者】が、「建白七策」とそっくりの意見書【「時勢改正」】をほぼ同時期に薩摩藩主島津忠義宛に提出しているが？

→たぶん、「建白七策」の写しだろう。詳しい経緯はよくわからない。

→ *（当日ご参加の桐野作人様からの補足説明～嵯峨根は元治元年に薩摩が開設した開成所の教官に就任している。）*

(3)①赤松小三郎の「建白七策」と、坂本龍馬の「船中八策」との関係については？

→ *（当日ご参加の知野文哉様からの回答～「船中八策」は後の「新政府綱領八策」（龍馬の署名あるので実存）を基にして創られたもの。<u>「建白七策」と「新政府綱領八策」はいずれも「西洋事情」が基になっているので、内容が似ているのもある意味納得できる。</u>「新政府綱領八策」が「建白七策」を見て書かれたかは不明。見て書かれた可能性はゼロではない。）*

②「議政局」という言葉は「建白七策」と「船中八策」に使われていて、「新政府綱領八策」では「議政所」となっているが？

→確かに、「議政局」は他では見当たらない。そういう意味では「建白七策」と後世の創作であろう「船中八策」は繋がりがある。

(4)「建白七策」が、越前（春嶽）、薩摩（久光）に建白されたが、盛岡藩の記録本「慶応丁卯（ていぼう）雑記」に<u>幕府への建白として</u>写しが載っている。他にも広まっていたのでは？

→確かに盛岡藩には幕府の情報がいろいろ伝わっていたという記録がある。今のところ他に建白したという記録は確認できていないが、一般論として「建白七策」の情報が巷に流れたことは十分有り得る。

(5)赤松の人物像について～途中までは自然科学を中心に学んでいたが最後は政治にも関与した。転換期はあったのか？

→はっきりとした転換期は無かったのでは・・。当時の学問は専門分野の境があまりなかった。

・・

※講演を通じて印象に残ったこと、思ったこと

１．赤松が「建白七策」を松平春嶽や島津久光といった当時の大物政治家へ建白できたのは、

いずれも赤松と関係があって、きっと読んでくれるだろうと思ったから建白した。
改めてなるほどと思った。（上記質疑応答の(2)①を参照）
更には彼が既に世間で一定の評価を得ていたことが前提にあった。その代表が「英国歩兵錬法」の翻訳と、私塾での最先端の英国式兵学教授を行った兵学者としての実績。また、その私塾では、兵学以外にも欧米の文化・歴史・政治体制などについての紹介等、最先端の講義も行われていたとのことで、恐らく春嶽や久光は私塾の門下生等を通じて赤松の兵学以外の先進的な知識や思考についても注目していたのだろう。

２．今後赤松小三郎をより理解するためには、①赤松小三郎と上田藩（上田松平家）との関係について理解を深める必要があること、更には、②全体の時代背景の中での上田藩（上田松平家）の動きや位置づけを正しく把握する必要があること、を再認識した。
①については、例えば、京都での私塾主宰は上田藩の許可を得ていたか？、そもそも幕府への建白や春嶽らへの「建白七策」の建白は上田藩の許可を得ていたのか？ それとも事後報告だったのか？、なぜ上田藩は赤松小三郎をもっと優遇しなかったのか、等々。たぶんそれらは②と密接に関係しているはずで、今後の研究課題としたい。

以上

赤松小三郎研究会 事務局　荻原　貴（７９期）

次ページ以降掲載写真説明
写真１　丸山会長挨拶
写真２　青山先生
写真３　青山先生講演風景１
写真４　青山先生講演風景２

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4